スピノザの必然主義における決定論と様相の絡み合いを解きほぐす

スピノザ協会第73回研究会

2023年12月23日

大畑浩志（大阪公立大学）・立花達也（大阪大学）

1. 必然主義と偶然主義

スピノザは必然主義者か

- 誰もが認めるように、スピノザは因果的決定論を支持している。

  因果的決定論：現在の世界の状態と自然法則のセットから未来の状態が一意に定まる。

- しかし、スピノザが必然主義者かどうかについては意見が分かれる。

  必然主義：起こることはすべて必然的に起こり、起こらないことは必然的に起こらない。

→ギャレットの有名な論文「スピノザの必然主義」[Garrett 1991]以降、スピノザは必然主義者か、あるいは偶然主義者かが熱心に議論されている。

スピノザの決定論

第一部定理28：なんであれ個的なもの、すなわち有限かつ限定された存在をもつ事物は、やはり有限かつ限定された存在をもつ他の原因から存在し働くように決定されるのでなければ、存在することも働くように決定されることもできない。そしてこの原因もまた、やはり有限かつ限定された存在をもつ他の原因から存在し働くように決定されるのでなければ存在することも働くように決定されることもできず……というふうに無限に進む。

→有限様態（有限かつ限定された存在をもつ事物）はなんであれ、他の有限様態によって存在と作用へと決定されねばならない。

→有限様態が有限様態の存在およびあり方を決定するこの系列は、分岐することなく無限に続く。これは明確に**決定論的世界像**。

決定論と偶然主義の両立？

- スピノザ的決定論においては、現在の世界にある有限様態から、未来の世界の有限様態が決定される。

→こうした決定論は、必然主義を含意するのではないか。

素朴に考えると、決定論と偶然主義は両立しない。

たとえば、現在存在する小球xの位置と速度および運動方程式から、未来のxの位置と速度が決定されるのだとすれば（これがまさに決定論）、そうして予測された位置にxがあることは必然であるように思える。

カーリー・ベネット・ギャレット

しかし、ギャレット(1991)の議論の枠組みをつくったカーリー(1969)やベネット(1984)らによれば、スピノザに決定論と偶然主義の両方を帰することは、少なくとも論理的に破綻していない。

- カーリー(1969)：スピノザは偶然主義。
- ベネット(1984)：スピノザのテクストを解釈する限りでは、彼が必然主義か偶然主義かは決められない。とはいえ、決定論と偶然主義は両立可能であり、われわれにはスピノザにその両方を帰する十分な動機がある（偶然主義寄り）。
- ギャレット(1991)：スピノザは必然主義。

本発表の問題関心

(A) 決定論と偶然主義はいかにして両立するのか。

→その両立を可能にする「**複数系列の実在論**」を明確にする。

(B) 必然主義と偶然主義がともに整合的な理論であるならば、それぞれの理論がもつ最大の特徴はなんなのか。

→PSR（充足理由律）と偶然的真理は、共に直観的でありスピノザのテクストとも整合するにもかかわらず両立不可能である。必然主義は前者を、偶然主義は後者を選ぶ理論である。

(C) 我々はどちらの解釈を選ぶべきか。

→近年の必然主義の批判者は、「**必然主義とは何か**」**を十分に理解しているとは言えない。**この点を明確化することで、必然主義は偶然主義に対して（圧倒的有利にあるとまでは言えずとも）まともに並び立つ理論であることを示す。

発表の流れ

1. 必然主義と偶然主義
2. 決定論と偶然主義はいかにして両立するか
3. PSRと偶然的真理のジレンマ
4. 必然主義批判に抗して
5. あらためて必然主義とは何か

2. 決定論と偶然主義はいかにして両立するか

大前提：スピノザによれば、決定論は（必然的に）正しい。
対立は、これを前提にした上で生じている。
決定論的偶然主義 vs. 決定論的必然主義

カーリーによる偶然主義

[Curley 1969: 105]の説明：

それ自体で必然な命題と他の命題によって必然化される命題からなる集合を世界としてとらえたとき、現実世界に存在しない命題から成るが自己矛盾しない他の世界が可能である。

[Curley and Walski 1999: 241]の説明：

第二部公理1：人間の本質は必然的な存在を含まない。すなわち自然の秩序から、この人間あるいはかの人間が、存在することも存在しないことも起こりうる。

・（一例として）スピノザのテクストは、このあるいはかの人間が存在する現実世界の他に、その人間が存在しない他の可能世界があることを実際に示唆している。それらの可能世界には、無限に過去に遡っても人間を帰結する原因が存在しないから

→「自然法則と、無限に遡行可能な因果的に繋がった有限様態の系列」を、便宜的に「可能世界」と考えれば、スピノザのテクストはそれらが複数あることを排除しない。

可能世界の複数性が読み取れる。**偶然主義の成立**。

偶然主義は可能世界を必要とする。

カーリーの主張：

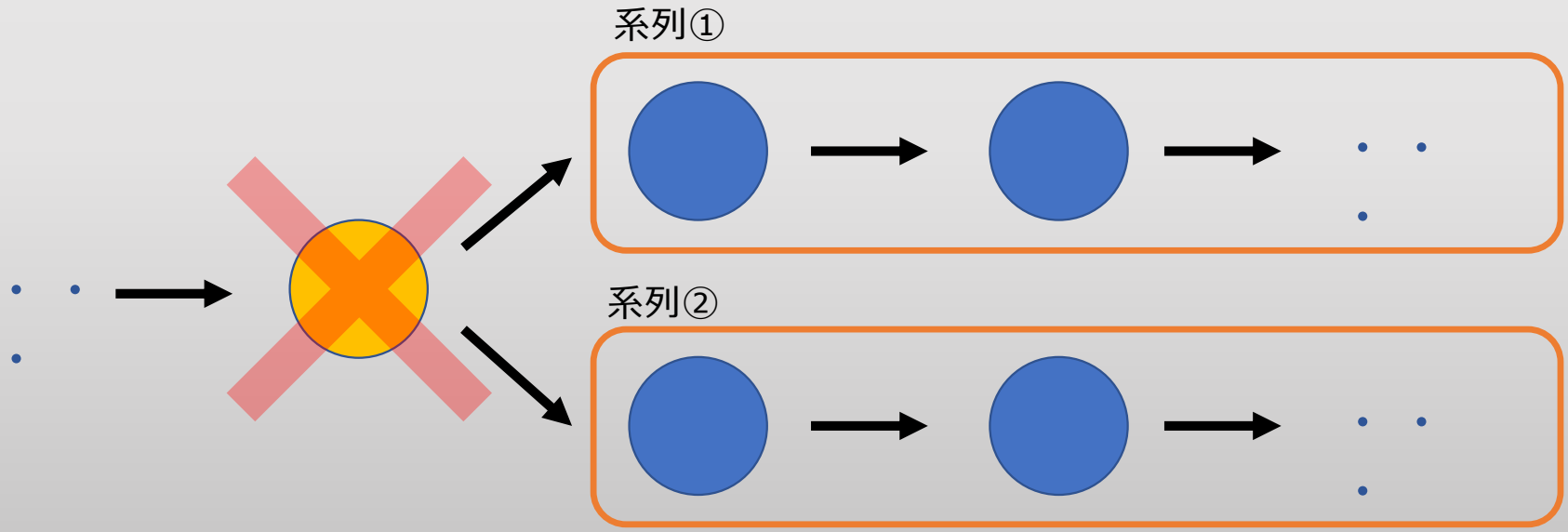
- スピノザは決定論者である。それも、必然的に決定論が正しいと考えている。
- しかし、**決定論が成立する可能世界が複数ある**ことを認めている。

偶然主義を考える上で注意すべき点：

- 本来、世界に偶然性を認めるために可能世界の存在は必須ではない。なぜなら、可能世界ではなく、分岐モデル（枝分かれモデル）で偶然性を捉えることもできるから。
- しかし、スピノザ解釈を前提とすると、偶然主義は可能世界を必要とする。なぜなら、決定論が正しい限り、分岐モデルをとれないから。系列の分岐を否定するにもかかわらず、偶然性をたんなる想像以上のものとして考えるためには、可能世界が必要。

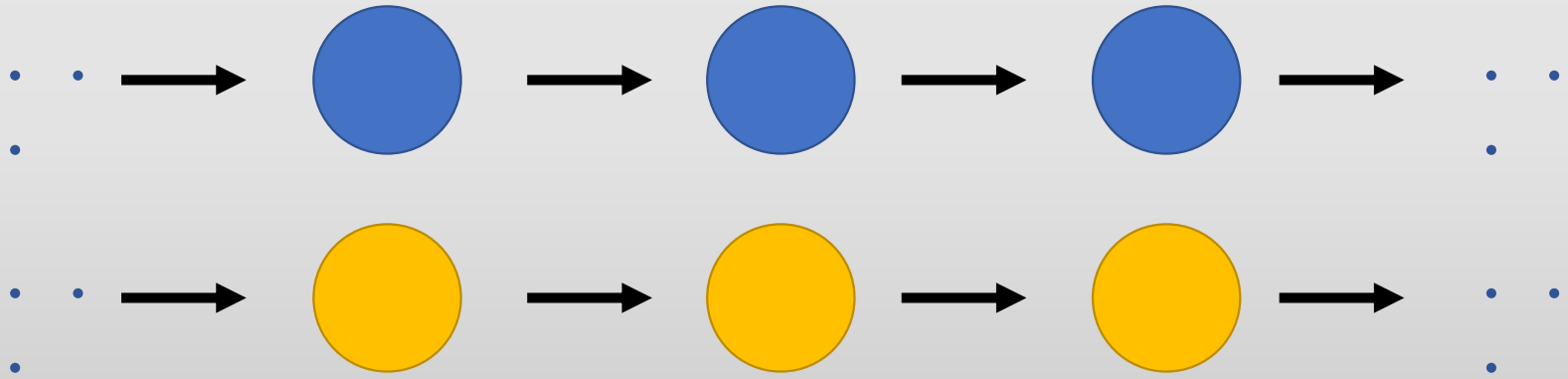
無限系列は途中で分岐しない

二つ以上の異なる未来へと分岐するようなポイントを考えることはできない。



決定論と偶然主義の両立

しかしその場合でも、現実の系列とは異なる、他の決定論的系列が存在することは排除されない。



カーリーの議論の再構成

（前提1）スピノザのテクストは、世界に偶然性を認める。

（前提2）偶然性は、分岐モデルか可能世界モデルのどちらかで理解される。

（前提3）スピノザは決定論者であり、分岐モデルを認められない。

（結論）ゆえに、スピノザの偶然主義は可能世界モデルで理解される。

3. PSRと偶然的真理のジレンマ

我々の考えでは、「複数系列の実在論」を受け入れる限り、偶然主義と決定論は両立する。

→偶然主義は少なくとも内的に破綻した理論ではない。

では、必然主義と偶然主義の争点はどこに見出されるのか。

PSRと偶然的真理の両立不可能性

すぐ後にみる議論によって、スピノザ解釈から独立に、以下の三つの直観的な命題は相互に成立しないと言われている。

(1) あらゆることは説明をもつ。（PSR）

(2) ものごとは他の仕方でもありえた。（偶然的真理）

(3) 必然的な何かから導かれるものは何であれ、それ自体必然的である。（様相推移律）

(3)はスピノザのテクストから明らかである。cf. 第一部定理21

よって、(1)を支持し(2)を棄却するのが必然主義、(2)を支持し(1)を棄却するのが偶然主義と位置付けられる。

偶然主義とPSRは両立不可能である。[Bennett 1984: 115; Lin 2012: 422; Lin 2019: 174]

① 少なくともひとつ偶然的に真なる命題がある。（偶然主義）

② 少なくともひとつ偶然的に真なる命題があるならば、すべての偶然的に真なる命題の連言である巨大な命題Pが存在する。

③ PSRは真である。（PSR）

④ PSRが真ならば、命題Pは何らかの真なる命題Qによって説明される。

⑤ 命題Qは、偶然的に真か必然的に真かのどちらかである。

⑥ 命題Qが偶然的に真であるならば、②よりQはPに含まれる。ゆえに、これは説明とならないので③と矛盾する

⑦ 命題Qが必然的に真であるならば、PがQによって説明される以上、Pも必然的に真とならねばならない。これは②と矛盾する

（結論）以上より、①が偽か③が偽のどちらかである。

PSRは必然主義を含意する

「偶然主義が偽」または「PSRが偽」。

変形すれば、

- 偶然主義が真ならばPSRは偽。

対偶を取れば、

- PSRが真ならば必然主義が真。

つまり、

- PSRは必然主義を含意する。

合理主義者スピノザ

スピノザのテクストから、PSRを支持していると思われる箇所を引き出すことは容易。

- 第一部公理2：他のものによって考えられることができないものは、それ自身で考えられねばならない。
- 第一部定理11証明2：どのような事物であれ、なぜそれが存在するのかと同様、なぜそれが存在しないのかの原因ないし理由もまた指定されなければならない。

スピノザのPSRがもつスコープについては論争がある[Della Rocca 2008; Garber 2015; Lin 2019]。

だが少なくとも、どのPSRにも対応できることは任意の解釈にとって利点である。

必然主義の利点と欠点

利点：

スピノザは明確にPSRを支持している。そしてPSRは必然主義を含意する。それゆえ、必然主義が導かれる。

欠点：

「ものごとは他の仕方でもありえた」ということはあまりに直観的。ベネットによれば、たとえスピノザ（解釈者）であれ、偶然的真理を排して「良い哲学」を行うことはできない。また、カーリーらが指摘したように、スピノザのテクストにおいても、偶然主義を支持する部分はないわけではない。

4. 必然主義批判に抗して

必然主義に対する批判

必然主義の利点：PSRを維持できる

→だが、近年以下のような批判が。

・必然主義であっても説明が与えられない事実が存在する。**PSRを維持できない**。

・あるいは、説明を与えようとするとまた**問題含みな前提にコミットする**ことになる。

本発表は、こうした批判は、誤った必然主義理解に基づいていることを示す。

そもそも必然主義とは何か

- しばしばスピノザの必然主義は、「**現実世界が唯一の可能世界である**」と表現される。
- こうした必然主義理解は、カーリーやベネットといった批判者はもちろん、必然主義の代表的支持者であるギャレット[Garrett 1991: 191-2]にも共有されている。
- しかし我々の考えでは、この簡潔な表現は、**必然主義に対する誤った理解を促す可能性がある**。

そもそも必然主義とは何か

「現実世界が唯一の可能世界である」という必然主義理解の問題：

可能世界の枠組み（複数系列の実在）を前提とした上で、現実世界だけが残るように他の世界を「**切り落とす**」ないし「**縮減する**」という考えだとみなされる。

実際、こうした必然主義理解に基づいた記述が、スピノザ解釈者には見られる。

- コイスティネン
- ベネット
- 木島

コイスティネン[2021]

必然主義には、次の二つの理解の仕方がある[Koistinen 2021: 222]。

(1) 因果的決定論 ＋ X = 必然主義

(2) もしXが存在するならば、必然主義かつ因果的決定論である。

→いずれにせよXを探すのが、必然主義の課題。

コイスティネン自身は、(2)の理解からXを探求する（ので、我々の考えでは悪くない）。

だが、(1)の理解が誤っているとは言っていない。だが我々の見立てでは、(1)のXがいわば「**他の系列を縮減する原理**」であり、必然主義にこれを求めるのは間違い。

ベネット[2002]

ベネット：ある箇所でスピノザは、彼自身の決定論から必然主義へと推論する議論を与えている。それは、次の反論に対応しようと試みるものである（が、うまくいっていない）。

「仮に神が別の事物世界を創造し、もしくは自然とその秩序について永遠このかた違う決裁をしていたと仮定しても、そこから神において何らかの不完全性が帰結することにはならない」（第一部定理33備考2）

この反論を純化すると次のようになり、スピノザはこれに答えていない：

- 各々の個別的な出来事が、必然的な法則に従って、それ以前の出来事によって必然化されることを認めたとしても、一連の出来事全体はなお、そうであるのとは異なっていたかもしれない。
- その系列に始まりがなく、それゆえその系列のすべてのメンバーがそれ以前のメンバーによって必然化されることを認めたとしても、他のある系列ではなくこの系列が現実的であるべきであったという必然性はなお存在しない[Bennett 2002: 175]。

→つまりベネットによれば、必然主義が成立するためには、複数の系列のなかでこの世界を「必然化する」ないしこの世界だけへと「縮減する」原理が必要。

木島[2021]

木島：ギャレットらの解釈は、我々がまさに神の力の表現そのものとして特定した個物間の因果的必然性の上位に、それを制約する、充足理由律と結びついた形而上学的必然性を捉える点で、反自然主義的な性格をもつ。

→木島は「因果的決定論 ＋ X = 必然主義」を前提とし、かつXに強引に（反自然的な仕方で）原理を与えるのがPSRであると理解している。

「縮減の原理」を求めるという誤り

- [Curley 1969]、[Koistinen 2021]の(1)、[Bennett 2001]、[木島 2021]に共通する誤り

→可能世界の枠組みないし複数系列の枠組みを前提とした上で、必然主義とは、複数の系列から現実世界以外が「縮減された」立場だと考えている。

→その上で、ベネットや木島は、そうした縮減の原理の不在によって、必然主義の正当性に疑問を投げかける。

- しかしこれは、必然主義に対する誤解。
- **必然主義を「可能世界」の枠組みで捉えること自体が誤り。**

「なぜこの系列が現実なのか」問題

「**なぜこの系列が現実なのか**」という問いは正当か。

→偶然主義に対しては、**正当な問い**でありうる。

- 決定論的偶然主義は「複数系列の実在論」を受け入れる。それゆえ、この系列だけが現実であることは問題となる。

（ただし、偶然主義はPSRを否定するため、この問いに対しては「説明が与えられない」と言えばそれで良い[cf. Curley & Walski 1999: 258-9]。）

「なぜこの系列が現実なのか」問題

「なぜこの系列が現実なのか」という問いは正当か。

→必然主義に対しては、この問いは**疑似問題**である。

・この問いは、他の系列が可能であってはじめて意味をなす。しかし必然主義においては、はじめから我々が住むこの系列しかない。

・論理的観点から：

「$\phi \rightarrow \Box\phi$」という必然主義の主張からは、（「$\Box\phi \rightarrow \phi$」という明らかに真な前提をおけば）「$\phi \leftrightarrow \Box\phi \leftrightarrow \Diamond\phi$」が帰結する。つまり「現実に起こること」と「必然的に起こること」と「可能的に起こること」の区別が崩壊する。

→いわゆる「**様相の潰れ**」。現実性は、ただ「在ること」以上に特異な性質ではない。

「なぜこの系列が現実なのか」という問いが偶然主義にとっての問題であり、必然主義にとっての問題ではないことは暗黙に了解されていると思われる。

- Huenemannは、カーリーに対して「あなたのスピノザは、ある可能な宇宙が実在し、別の宇宙が実在しない理由を説明できない」と異議を唱えた。それに対してカーリーは、この宇宙が実在し、他の宇宙が実在しないということをブルートファクトであると認める [Curley & Walski 1999: 258-9]。
- カーリーは必然主義と充足理由律を結びつけることを注意深く避けている。
- ギャレットは、カーリーが解釈したスピノザは充足理由律へのコミットメントと整合的ではないという難点を指摘するが、必然主義を充足理由律と結び付けてはいない[Garrett 2020: 125]。

時間とのアナロジーで考える

現在主義（「存在するものは何であれ現在にある」という理論）に対して、「なぜこの今だけが現在なのか」と問うのは、ミスリーディング。

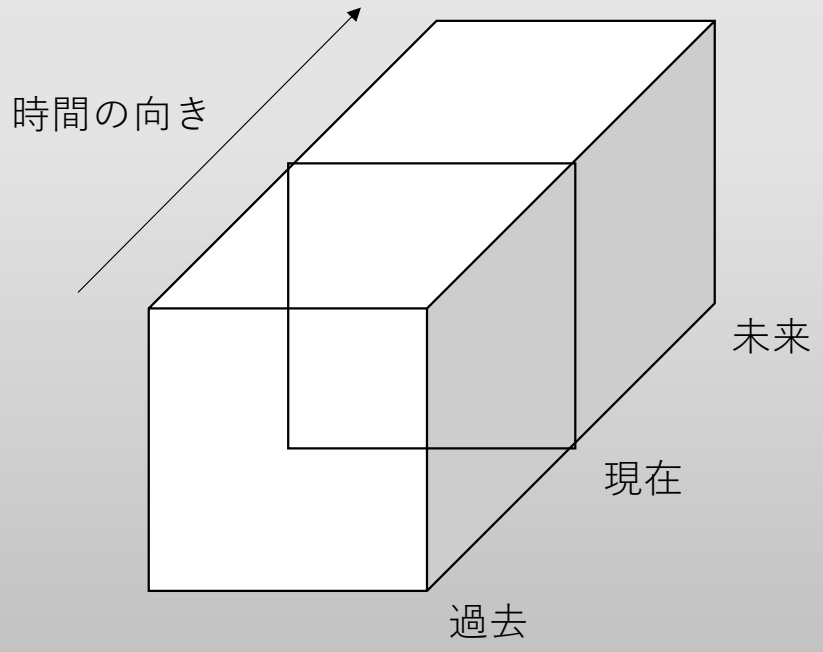
→今以外にも複数の時点が存在し、そのうちで「今」が特権的な現在性を帯びているわけではない。

→また、現在という以外の時点が「切り落とされている」あるいは「縮減されている」と考えるのも誤り[cf. Sakon 2021]。そのような「縮減の原理」は現在主義に必要ない。

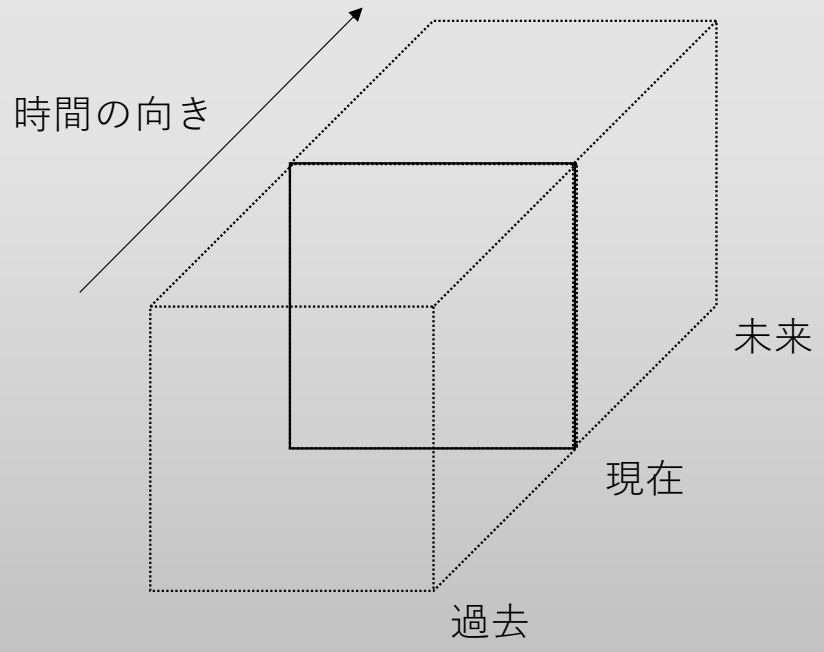
現在主義によれば、「現在にある」ことと「存在する」ことは同義。

どちらも誤った現在主義の見方

時間ブロックのなかで、特権的な現在がある



時間ブロック的描像から、現在以外の時点を切り落とす（縮減）



現在主義に対して、
「なぜこの今だけが現在なのか」と問うのは
ミスリーディングであるのと同様に、

必然主義に対して、
「なぜこの世界だけが現実なのか」と問うの
はミスリーディング。

まとめると…

必然主義に対する批判：スピノザの必然主義は、PSRを維持できることがメリットだった。しかし、そのメリットすら失う可能性がある。

- ベネット：因果的決定論＋X ＝必然主義。だが、「このXが何か」は説明できない。
- 木島：因果的決定論＋X＝必然主義。しかし、PSRを無理やり維持してXを説明することは、悪しき反自然主義に陥る。

我々の応答：そもそも、「因果的決定論＋X＝必然主義」という理解が間違っている。Xの原理によって複数の世界からひとつの世界へと縮約するのは、**系列実在論描像から必然主義を理解する誤り**。

5. あらためて必然主義とは何か

PSR再訪

- ここまでの議論は、必然主義がPSRと適切に両立することを擁護してきた。
- しかし、仮にPSRが誤っていたとしても、そのことによって必然主義が偽だと確定するわけではないことには注意せねばならない。
- PSRは必然主義の**主要なメリット**であるかもしれないが、**必要条件ではない**。

→先ほどみた「PSRと偶然主義の両立不可能性」議論は、PSRが必然主義の十分条件であることを教えるが（「PSR→必然主義」は真）、必要条件である（「必然主義→PSR」が真）とは述べていない。

そして実際、PSRに基づかない必然主義擁護は可能。

PSRに依存しない必然主義擁護

第一部定理16：神的本性の必然性から無限に多くのものが無限に多くの仕方で（すなわちある無限な知性のもとに落ちてきうるすべてが）出てこなければならない。

(1) 無限な知性に落ちてくるすべては神的本性の必然性から出てくる。

(2) 「神的本性の必然性」は何か必然的なものである。

(3) 必然的であるような何かから出てくるものはそれ自体必然的である。

(4) 現実的であるようなすべては無限な知性のもとに落ちてくる。

(5) 現実的であるようなすべては必然的である。（必然主義）

[Garrett 1991: 205-6; Lin 2020: 172]

あらためて、必然主義とは何か

スピノザを必然主義的に読むことの利点に、PSRの維持があることは間違いない。

だが、テクスト解釈上PSRが否定されたとしても、必然主義が倒れるわけではない。この解釈上のスピノザは、PSRについての誤りを認めても必然主義を維持できる。

PSRが倒れたと仮定して、それでもスピノザを必然主義的に読む利点とは何なのか？ この発表ではそれについてまだ考え切れていない

しかし少なくとも、**「縮減の原理」に関わるものとして必然主義を理解することから脱して、議論を再開する必要がある。**

まとめ

- スピノザ解釈上、必然主義と偶然主義の対立がある。偶然主義はスピノザの決定論と両立不可能であるように思われるが、「複数系列の実在性」を前提とすれば両立する。
- 必然主義はPSRをとり偶然的真理を諦め、偶然主義は偶然的真理をとりPSRを諦める理論として整理可能。
- しかし、必然主義が健全な仕方でPSRを維持できるのは本当かという偶然主義からの批判がある。
- だがこの批判は、偶然主義的描像（複数系列の実在論）から抜け出せないまま、必然主義に「縮減の原理」を求めている点で誤り。必然主義は、複数系列的描像を徹底的に拒絶する。

参考文献

Bennett, Jonathan. (1984). A Study of Spinoza's Ethics. Cambridge University Press.

——. (2001). Learning from Six Philosophers: Descartes, Spinoza, Leibniz, Locke, Berkeley, Hume, vol. 1, Oxford University Press.

Curley, Edwin. (1969). Spinoza's Metaphysics: An Essay in Interpretation, Harvard University Press.

Curley, Edwin and Gregory Walski. (1999). “Spinoza’s Necessitarianism Reconsidered.” In R. J. Gennaro and C. Huenemann (eds.), New Essays on the Rationalists. Oxford University Press.

Della Rocca, Michael. (2008). Spinoza. Routledge.

Garrett, Don. (1991). Spinoza’s necessitarianism. In: God and Nature in Spinoza’s Metaphysics (ed. Y. Yovel), 191–218. Leiden: Brill.

——. (2018). Nature and necessity in Spinoza's philosophy. New York City: Oxford University Press.

木島 泰三. (2021). 『スピノザの自然主義プログラム 自由意志も目的論もない力の形而上学』, 春秋社.

Koistinen, Olli. (2021). “Spinoza's Modal Theory.” In Yitzhak Y. Melamed (ed.), A Companion to Spinoza. Chichester, UK: Wiley. pp. 222–230.

Melamed, Yitzhak Y. and Martin Lin, "Principle of Sufficient Reason", The Stanford Encyclopedia of Philosophy (Summer 2023 Edition), Edward N. Zalta & Uri Nodelman (eds.), URL = <https://plato.stanford.edu/archives/sum2023/entries/sufficient-reason/>.

Newlands, Samuel.. "Spinoza’s Modal Metaphysics", The Stanford Encyclopedia of Philosophy (Summer 2023 Edition), Edward N. Zalta & Uri Nodelman (eds.), URL = <https://plato.stanford.edu/archives/sum2023/entries/spinoza-modal/>.

Takeshi, Sakon. (2021). “Presentists Should Not Believe in Time Travel.” 『科学哲学』, 2020, 53 巻, 2 号: 191-213

※本研究は、JSPS科研費（JP23K11998）の助成を受けたものである。